

# はしがき

シンジルト SHINJILT

南九州を対象に現代日本における狩猟実践を民族誌的に描き、その実態を浮き彫りにしようとしているのが本書です。本書の前半は五木村と多良木町を中心とする熊本県球磨郡（及び人吉市）に、後半は球磨郡と隣接する宮崎県東臼杵郡の椎葉村に焦点を当てます。

前半は熊本大学文学部の3年生によって書かれたもので、2015年3月31日に発行された調査報告書（「まえがき」の頁番号を除き、発行当時のまま収録）です。身近にありながらほとんどその存在が知られていなかった熊本の狩猟は、いかに実践され、その実践はいかなる社会文化的なインパクトを生み出しているかを明らかにすべく、2014年夏、社会調査実習の一環として、教員と学生の16人が調査チームを組み、現地に赴きました。

現地調査で猟師たちと直に接し、語りあい、共に行動することにより、それまで一般に流通していた「寡黙な猟師たち」という猟師のイメージは必ずしも現実には当てはまらないことが明らかになりました。また、猟師が生活する社会は「閉ざされた」ものではなく、それを取り巻く外部社会との関わりの中で常に再編されています。さらに、エキゾチックなものとして「神秘化」されやすい狩猟文化の多くもまた、われわれにとって馴染み深い要素を取り込んだ上で成り立っていることが解き明かされました。

報告書は発行されて間もなく、「熊本日日新聞」（2015年5月22日朝刊）誌上に取り上げられました。そこでは、「特に獲物の解体の様子は克明に著し、豊猟を願うまじないや内臓特有の生臭いにおい、解体作業中の猟師の表情を描写」していると、報告書の中味が分かりやすく紹介されました。新聞記事を読み、狩猟に関心をもつ研究者、大学院生、マス・メディア関係者、熊本県内外の一般市民から数多くの問い合わせがありました。こうした読者からの要請に応じて、報告書はたちまち増刷されたのです。

報告書を読んだ方々から寄せられてきた感想の中で最も多かったのは、熊本（九州）にもこんなおもしろい狩猟文化があるのか、というものでした。これは、現代日本における狩猟という営みの存在自体に対する素直な驚きでもあるのだと私は理解しています。また、ある文化人類学者からは、「狩猟採集民というと、つい海外の民族を思い浮かべがちですが、国内の足元にもさまざまな生業があります。そのことを確認するに役立ちそうです」とのコメントをいただき、本報告書に期待し得るポジティブな役割を適切に表してくれました。それと同時に、このコメントからも、多くの日本人の理解において、狩猟は一種の異文化となっているということが再確認できましょう。

日本を含めて、都市化に特徴づけられる現代社会においては、動物の殺生や食肉の処理は日常生活と切り離される一方、動物愛護は無条件に叫ばれがちです。「殺生」という行為を不可視なものにしたうえで、「愛護」という理念に同一化したがるわれわれ現代人は、多くの動物の命をいただきながら生かされている生身の自分の存在をまるで否定しようとしているかのようにさえ思われるある種の分裂的状态におかれるのではないのでしょうか。

したがって、ストレートに殺生を意味する狩猟について考えることの意義は、狩猟免許をもつ一部の人間と野生動物との間の関係にとどまらず、人間と動物の関係一般、ひいて

は、現代社会における生命観のありようを再考することにもつながっているという点にあるといえましょう。報告書に関心を示してくれた読者の数多くの感想から、私は上記のような手ごたえを感じています。

報告書の対象地域となった熊本県球磨郡は、地理的に南九州に位置しています。南九州は思いのほか広く、また、球磨郡以外のいくつかの地域においても、狩猟は今なお実践されています。例えば、球磨郡に隣接する宮崎県椎葉村がそうです。さらに、椎葉村は、日本の狩猟をめぐる数少ない研究において、長年注目されてきた地域でもあります。では、今、椎葉村で展開されている狩猟実践の特徴はいかなるものであり、それと熊本県球磨郡との異同はどのようなところにあるのでしょうか。

比較の手法を導入し、熊本県球磨郡の事例を積極的に相対化するならば、南九州における狩猟の実態が浮き彫りになるように思えます。こうした観点に立ち、宮崎県椎葉村の狩猟の調査研究に従事してきた合原さん、日本国内外の狩猟実践とその研究に詳しい近藤さんに特別寄稿をしていただきました。本書の後半は、この二人の若手人類学研究者のレポートによって構成されています。

合原さんは、それまでは狩猟の対象であるにすぎなかったイノシシとシカが、近年、田畑や山林に深刻な被害をもたらすようになってきている椎葉村における狩猟の「今」を取り上げています。具体的には、駆除の現場における猟師と「山の神」の位相など、猟師による害獣駆除の実際に着目することで、新しい局面を迎えた椎葉村の人間と野生動物の関係を民族誌的に描き出しています。なお、本書前半の文脈でいえば、合原レポートは、全体としては、報告書の第2部（社会）と第3部（文化）に照応しています。

近藤さんは、五木村や椎葉村の事例を踏まえつつ、それらとの比較の意味において、アラスカ内陸に位置しロシア正教を信仰するニコライ村の先住民の狩猟経験を取り上げています。具体的には、捕獲や解体の工程、獲物を分けあう作法、豊猟のためのまじない、「山の神」のための儀礼を記述分析することで、3つの地域の言語的社会的な違いを超えた、狩猟文化としての共通性を抽出しています。本書前半の文脈でいえば、近藤レポートの本文は報告書の第1部（生業）と第3部に、その付録は報告書の第2部に照応しています。

前半・後半を問わず、本書は総じて、「狩猟」を基軸にしつつ、南九州地域における多様な生業の在り方、社会関係の形成の過程、地域文化の動態を描いてきました。周知のように、西洋近代の科学技術を導入し、非西洋世界で最も近代化に成功したのが日本であり、そして、昨年夏ユネスコの世界遺産の登録が決定された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の分布が顕著に示すように、日本における近代化の先駆けの一つが九州です。その意味で、九州、ひいては、日本の現在や明日を論じるのに、果たして狩猟は有効な切り口になるかについては疑問を呈する方もいるかもしれません。

しかしながら、これまでの九州、ひいては、日本の文化が決して一様ではなかったように、これからも多様であり続けるでしょう。文化的多様性が日本の明日を展望する上で、依然有用であるとすれば、多くの日本人にとって「異文化としての狩猟」を取り上げることの意義も、依然重大であり続けるでしょう。

2016年2月10日  
熊本大学・文学部・教授